

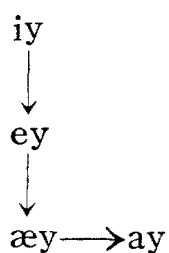
MEĭ の発達過程について

平 郡 秀 信

1. 序 論

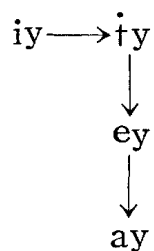
MEĭ の発達過程に関して、今日までに次の3つの見解が提唱されている。

(1) MEĭ が二重母音化し、lowering が完了した後で、centralization が生じたという見解。図示すると、



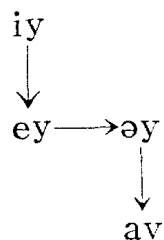
Ellis⁽¹⁾, Sweet⁽²⁾, Lehnert⁽³⁾, Wyld⁽⁴⁾ はこの見解をとっている。

(2) MEĭ が二重母音化し、centralization が生じた後で、lowering が生じたという見解。



Kökeritz⁽⁵⁾, Dobson⁽⁶⁾, Stockwell⁽⁷⁾, Prins⁽⁸⁾ がこの見解をとっている。

(3) MEi が二重母音化した後、先ず lowering が生じ、その後で centralization が生じ、その後で再び lowering が生じたという見解。



Luick⁽⁹⁾, Jespersen⁽¹⁰⁾, Ekwall⁽¹¹⁾, Zachrisson⁽¹²⁾, Chomsky⁽¹³⁾ と Halle, Wolfe⁽¹⁴⁾ がこの見解をとっている。異常綴字、正音学者の陳述及び脚韻からの証拠を分析することによって、MEi の標準英語における発達過程を再検討するのが本稿の目的である。

2. 本 論

2. 1. 異常綴字

MEi の early Mod StE の音価を推定するのに関係のある証拠を Wyld⁽¹⁵⁾, Kökeritz⁽¹⁶⁾, Prins⁽¹⁷⁾ から拾い集めて、整理すると次のようになる。

(1) MEi を ey 又は ei と綴った例：

said (side), wais (wise) —Cursor Mundi Cott. Vesp. MS. (C. 1400), bleynd (blind), meyld (mild), feyr (fire), neynthe (ninth), weyzt (wight) —St. Editha (1421), abeyd (bide) —Marg. Paston (1440-70), meichti (mighty), breicht (bright), seicht (sight), deifyrs (divers), ei (I) —The Hymm to the Virgin (C. 1500), Elle of Wyght (Isle of White), trey (try) —Sir Thomas Seymour (1544), feyre (fire) —Henry Machyn (1550-3), meizt (might) —John Hotham of Scarborough (1570) obleiged (obliged) —Sir R. V. (Verney Memoirs)

(1647), obleige (oblige) —M. Eure (Verney Memoirs) (1657).

(2) a) MEi を oy 又は oi と綴った例:

defoyled (defiled) —Mnk. of Evesham (1482), joyst (jiste)
— (1494), boyle (bile) — (1527), defoylyng (defiling) —Rede
me, etc. (1529), Smoile (Smile) —Sha. L. 2. 2. 88, obroyn
(OBrien) —St. of Irel. (16世紀).

b) MEōy を y 又は i と綴った例:

anynted (anointed) —St. Editha (1420), dystried (destroyed),
pyson (poison) —Gregory (before) (1467), Gine (join) —Cary
Stewkley (Verne Memoirs) (1656), byled leg of mutton (boiled)
—Dr. Denton (Verney Memoirs) (1670), implyment (employ-
ment) —C. Stewkley (Verney Memoirs) (1686), regis (rejoice)
—Mrs. Basire (1654).

MEi を ey 又は ei と綴った異常綴字, MEi を oy 又は oi と綴った異常綴字及び MEōy を y 又は i と綴った異常綴字は16世紀以前から見出されているが, MEi を ey 又は ei と綴った異常綴字の方が MEi と MEōy の水平化を示す異常綴字より多く見出されている。16世紀でも MEi を ey 又は ei と綴った異常綴字が MEi と MEōy の水平化を示す異常綴字より多く見出されている。17世紀になると, 16世紀とは逆に, MEi と MEōy の水平化を示す異常綴字が MEi を ey 又は ei と綴った異常綴字より多く見出されている。MEi を ey と綴った異常綴字の後で MEi を oy と綴った異常綴字が生じている。このことは, 後述する正音学者及び脚韻からの証拠と決して矛盾していない。

2. 2 正音学者の陳述

MEi の early Mod StE の音価を推定するのに何等かの証拠を提供している正音学者を Dobson, Wolfe に基づき, 整理したところを表にすると次のようになる。() はその発音が正音学者の正常な発音ではないことを, ? は正音学者の記述から, その意図している音価が不明であるか, あるいわ, 何れとも決め難いことを意味するものである。

表1

	MEi	MEāy	MEu
Smith (1568)	iy	āy? āy?	u
Hart (1551, 1569)	ey	(āy), (āy)ε? ē?	u
Bellot (1580)	ey	ē? ā?	u?
Bullokan (1580)	iy?	ēy?	o
Robinson (1617)	ey	āy, ā? ē?	u
Gil (1619)	ey	āy, ēy(ē)	u
Butler (1633)	?	āy, ē	u
Daines (1640)	ey	ēy?	u
Hodges (1643, 1644)	?	āy, (ē)	u, ə
Wallis (1653)	əy?	āy, (ē)	u, ʌ
Wilkins (1668)	əy	āy?	u, ə
Coles (1674)	əy	āy? ēy?(ē)	u, ə
Cooper (1687)	əy	(āy)ē(ēy)	u, ə

16世紀の正音学者のうち, Smith, Bullokar は MEi を MEi の長音としている。Dobson は MEi の early Mod StE における最初の段階は [iy] であったと考えているが, Smith 等の証拠を MEi が当時 [iy] であったとは解釈していない。彼⁽¹⁸⁾は「Viëtor の想定するように [iy] <MEi と [i:] <MEē の両方が共存し得たとは, 到底考えられない。その場合の両音の差は, 両音が互いに独立した音素として区別され得るには——MEi と MEē はずっと区別されてきたのだが——僅少でありすぎる」と考え, Smith 等の証拠を MEi が当時 [əy] であったと解釈している。彼は彼等が実際には [əy] と発音していたにもかかわらず, MEi を i の長音と見做しているのは彼等の音声分析の不手際によるものであると考えている。Dobson の主張するように, MEi の16世紀半の音価が [əy] であったと仮定すると脚韻からの証拠と相容れないものとなる: 比較的保守的な発音を当時の標準音として記述している正音学者からの証拠から, MEi の16世紀半の音価が [əy] であったと仮定すると, 比較的新しい発音に依存する MEi に [əy] を示す脚韻が16世紀前半に見出されてもよ

いはずである。MEi が [əy] の段階に達していたことを証明する MEi と MEōy の脚韻は16世紀では, Spenser の例を除けば, 稀で, 17世紀に入ってから見出されている。MEi と MEē は, その両音の差は僅少であっても同じではなかったため MEi と MEē は水平化されなかったこと及び MEi と MEōy の脚韻は17世紀に入ってから見出されるという事実により, MEi に関する Smith 等の証拠は [əy] でなく [iy] と解釈する方がよい。

ある正音学者が, 例えば, MEā を æ と転写しているのであれば, 一番素直な解釈は, その正音学者は MEā を [æ:] と発音していたと解釈することである。同様に, Hart 等の MEi の ei という転写は彼等が MEi を [ey] と発音していたととるのが自然な解釈であるが, Kökeritz は Hart 等の MEi に対する ei という転写を [ey] ではなく [əy] を表わすものと解釈している。Kökeritz⁽¹⁹⁾ は初期正音学者達が MEi を ei と転写したのは「[ə] を第一要素として持つ二重母音を表わすのに ei 以外に方法を持たなかった」(had hardly any other means of representing a diphthong with [ə] as its first element than ei) と考えるからである。正音学者の陳述を分析してみると, Hodges 以前の MEu に対し [u] を示している初期正音学者達は MEi に対し [ey] を示し, Hodges 以降の正音学者達は MEu に対し [ə] の存在を明記し, MEi に対し [əy] を示していることが分かる。Kökeritz のように, 初期正音学者達の MEi の ei という転写を [əy] を表すものと解釈できるのならば, 初期正音学者達は [ə] を認識できたことになる。初期正音学者は誰一人として [ə] の存在に気付いていない。このことは Kökeritz の解釈が無理であることを示している。又, MEi の当時の音価が [əy] であるならば, Robinson のように母音の長・短を表わすのにさえ全く新しい記号を用いている正音学者もいるのに, 何故 [ə] を表わす特別な記号を考案しなかったかという疑問も生じてくる。Dobson⁽²⁰⁾ が Wyld 説を反駁するのは次のように考えるからである。「普通とられている説は, MEi は [ey] [ɛy] [æy] を経て [ay] に発達したというものである。これは

全くあり得ない見解である。もし発達がこのようなものであれば、MEī は MEāy の [æy], [ɛy] への発達経路と交叉することになる。MEī が ey であると言う大抵の正音学者は MEāy を二重母音と発音していた。しかし、この2つの音は、現在なおそうであるように、常に区別されている。MEī が ey であったことは絶対にあり得ない」(a common theory ...is that MEī developed through the stage [ey] [ɛy] and [æy] to [ay]. This view is altogether impossible. If the development had been that suggested, MEī would have crossed the path of MEāy developing to [æy] and [ɛy]; most of the orthoepists who say that MEī was ey still pronounced MEāy as a diphthong. Yet the two sounds are always kept distinct, as they are still.) Dobson は MEī に [ey] を認めると、[ey] が今日の [ay] になるには [ɛy] [æy] の段階を経ることになる。そして、その場合には、MEī は MEāy と [ɛy] か [æy] で交叉し融合してしまうと考え、MEī を ei と転写した正音学者達の証拠を [ey] ではなく [əy] を示すものと解釈している。正音学者の MEāy に関する証拠はその記録している発音が多様である点を特徴としているが、MEāy は多くの方言で単母音化された。正音学者が MEāy に対して二重母音の発音しか認めていない時でさえも、MEāy が単母音化されたことに関しては脚韻からの証拠がある。⁽²¹⁾ 1600年頃、MEāy は MEē と押韻し、その後で MEā とも押韻している。MEāy は単母音であり、MEī は確かに二重母音であったのだから、MEī と MEāy は融合せず区別され得たはずである。

MEī に関する正音学者の証拠を再検討してみると、lowering が centralization より先に生じていることが分かる。これは後述する脚韻からの証拠とも矛盾しない。Dobson, Kökeritz の指摘するように、Hart 等の MEī の ei という転写を MEī の16世紀半の音価が [əy] であったと解釈すると、MEī が [əy] であったことを示す MEī と MEōy の脚韻が16世紀にも見出されてよいはずである。MEī と MEōy の脚韻が多く見出されるようになるのは17世紀に入ってからであるという事実によって、

MEi の16世紀半の音価は [əy] でなく [ey] であったと考える方が蓋然性が高くなる。

2. 3 脚 韻

MEi の early Mod StE での音価を推定するのに多少とも意味をもつ脚韻は次のものである。

2. 3. 1. MEi と MEē の脚韻 (die: me)

2. 3. 2. MEi と MEēy の脚韻 (repine: slain)

2. 3. 3. MEi と MEōy の脚韻 (smile: coil)

筆者が調査した37名の詩人⁽²²⁾にはそれぞれ次のような脚韻が見出されている。

2. 3. 1. MEi : MEē

A₁, 16世紀…cry: dye: see: destiny, life: priefe: liefе, pype: keep (Spenser), life: griefe 3回, rise: these (Chapman), life: strife: relieve (Drayton), life: grief (Fletcher, P.), life: grief (Chalkhill). 17世紀. …life: beleefe (Herrick), life: Griefe (Crashaw), life: griefe (Katherine), fine: seen (Wilmot), Life: Grief: Belief, Ride: Bleed: succeed (Prior)

A₂, 16世紀…I: be, hie: be (Wyatt), wise: these (Chapman), beguiles: feeles, strike: seeke: Greeke, strives: cleeves, sprights: meets: sheets (Drayton), I: impiety: me: hee (Donne), admiring: jeering, shine: Palestine: een (Fletcher, P.), nie: be (Hannay), reviv'd: griev'd (Bosworth), alive: grief, strikes: shriekes, (Chalkhill), 17世紀. …shrine: been (Herrick), alive: believe (Suckling), descry: majesty: she (Milton), I: be (Love-lace), spices: fleeces (Vaughan), reviv'd: retriev'd (Hall), survive: reprieve (Katherine), reply: we: piety, supply: Livery: see (Dryden), fry: be, strive: retrieve, survive: live: reprieve (Flatman), thine: seen (Shadwell).

B₁. 16世紀…dives:theeves(Chapman), drives:cleeves, wyld:field

(Drayton), belie him: free him, high: be, higher: free her, nigh: see, nigh him: see him (Hanney). 17世紀… hive: re-torative: retrieve (Benlowe), dive: retrieve (Waller), Lie: be: vanity (Milton), high: see (Lovelace), lie: me (Hall), Sky: Memory: thee (Dryden)

B₂. 16世紀…eyne: medicine: teene: weene (Spenser), eye: she: inchastitie (Chapman), flying: beeing: disagreeing (Drayton), eye (s): me, see (s) 2回, thee, tree, Eye: see, eye him: see him, die: be, free, me, see, thee, dies: degrees, dying: being (Han-nay). 17世紀… Eye: she (Lovelace), Eyes: peece (Vaughan), eye: thee (Cotton), eye: thee, fly: die: free (Flatman), fly: thee, (Shadwell), Eye: Votary: see (Prior), die: flee (Waller), die: be (Milton), die: free (Lovelace), die: thee: euthanasia (Flatman)

B₃. alike: seek (Raleigh), like: shriek (Chapman), like: seeke: weeke, like: Greeke (Donne) oblige: besiege, siege (Katherine)

C. eye: inchastitie (Chapman), cry: desting (Spenser), I: impiety (Donne), descry: majesty, Lie: vanity (Milton), reply: piety, Sky: Memory, supply: Livery (Dryden), etc..

D. apologiz'd: displeased, eyes: please, seas (Hannay), lye: Sea (Lovelace), Tide: Dead, Surprise: Seas (Shadwell), Night: Retreat, sublime: Dream (Prior)

Kokeritz⁽²³⁾ は MEi と MEē の脚韻について、次のように述べている:「flee と fly の混同が——それは OE に遡るものであるが——fly: he etc. を説明し, eye: knee は eye の北部形 [i:] を採用している。」(The confusion between *flee* and *fly*, which goes back to OE, accounts for the former rhymes, while the latter, from a ballad, employs the northern form of [i:] of *eye*). Kōkeritz が MEi と MEē の脚韻をこのように処理するのは, MEi の ModE にお

ける初期の発音 [iy] が Shakespeare の時代にまだ存続していた筈がないと考えるからである。しかし、この脚韻を [iy] が古風な発音としてまだ並存し、その発音を利用したものと解釈することも十分に可能である。そして、その場合には、この MEi と MEē の脚韻は Dobson-Kökeritz 説に有利な証拠となり、Chomsky-Halle 説に不利な証拠となる。A₁ の cry, life, pipe, rise, fine, ride の各語は、wright の *The English Dialect Grammar* にも [i:] 音の存在が明記されていないため、これらの語を含む脚韻は [iy] に依存するものと考えてよく、Dokson-Kökeritz 説に有利に働く脚韻となる。Dokson-kokeritz 説に有利となる MEi と MEē の脚韻は、17世紀より16世紀に多く見出されている。A₂ に属する MEi を持つ各語は wright の *EDGr* の中に、その語自体の記載がなく、[i:] が存在したかどうかは不明である。B₁ の MEi を持つ各語は Wright の *EDGr* によれば、() 内に示された方言で [i:] が存在している。dive (Norfolk, Suffolk, Sussex), drive (Gloucester), Wild (SW. Yorkshire, e. Somerset), lie (Durham), high (Edinburgh, Northumberland, n. Cumberland, Westmoreland), nigh (Northumberland, n. & s. Durham, m. & w. Yorkshire, se. & sw. Lancashire, nw. Derby) hive (e. Suffolk, Essex, Kent, Sussex), sky (n. Northumberland). 今日、MEi は北部方言、東部アングリア及び南東部諸方言では [i:] として残っている。これらの諸方言では MEi と MEē は [i:] で押韻可能となる。B₂ の eye, fly, die を含む脚韻は、Kökeritz によると [i:] に依存しているものである。Dobson⁽²⁴⁾ は、MEi は [k, dz] の前では二重母音化しなかったと考えている。Bullock, Hart は like に [i:] を、Coles, Strong, Young は oblige に [i:] を示している。B₃ の (a)like, oblige を含む脚韻は MEi が [k, dz] の前で二重母音化をおこなっていない [i:] に依存するものである。B 群に属する MEi と MEē の脚韻は疑義のあるものとなる。C の脚韻は名詞語尾 -y が韻律上の理由で強勢が置かれた時には MEi と同じ音価を持った事を示すにすぎないから、MEi の当時の音価を推定する証拠には

利用できない。D の MEī と MEē の脚韻は、これらの脚韻が見出される詩人では MEē と MEē の脚韻も多数見出されているため (MEē は 1500年頃までに [i:] になったと考える点では、今日すべての学者の見解が一致している。), [i:] に基づくものである。

2. 3. 2. MEī: MEēy

A₁, 16世紀。…abyde: asyde: hyde: eyde, accompanide: side: eide, asyde: seyde: eyde, beside: stupefide: tride: eide, (Spenser), flight: weight, light: weight, quite: over-freight, sight: weight (Chapman), dight: height, fights: sleights, light: height, mighty: weighty, night: height, plight: height: weight, sight: height 2回 (Drayton), night: sleight (Donne), write: sleight (Jonson), flight: height, knight: height, light: height, night: right: height (Fletcher, P.) might: right: height (Fletcher, G.) delight: height, despight: height, light: height 2回, weight, sight: height (Hannay), hight: sleight (Chalkhill)。17世紀。…light: height, right: height, write: weight (Herrick), delight: light: height, fight: sprite: height, flight: smite: weight, infinite: light: Height, light: sight: height, slight: height, Light: sight: height, smite: height: weight (Benlowe), delight: height, light: height (Waller), flight: height, knight: weight, slight: height, white: height, why: ay(Whiting), delight: Eight, write: height (Cleveland), spite: height (Crashaw), write: height (Lovelace), Eye: weigh, fright: Reight, Height: weight, Light: height, upright: Height, unite: Height (Marvell), light: height, unite: weight (Vaughan), affright: weight (Hall), bright: height, light: height (Katherine), aright: height, bright: Fight: height, height, flight: height 4回, Flight: Light: Height, weight, light: height 2回, Night: height, right: weight, sight: height 2回 (Dryden), flight: height (Flatman), light: weight, Light: Height (Shad-

well), Flight: height, Sight: Height (Prior), downright: height
flighi: height 4回, light: height, sight: height (Pope).

A₂, bright: despight: quight: streight, fyght: right: streight,
light: aright: weight: streight, might: Despight: streight: sleight,
might: fight: streight, quight: hight: wight: streight, fight:
dight: night: keight, hight: dight: plight: keight (Spenser),
night: straight (Vaugham).

B. 16世紀, …sleight: bayt: wayt: strayt, sleight: streight
(Spenser), height: deceipt 2回 (Greville), height: conceit, frei-
ght, Freight, straight, weight 2回, sleight: deceipt 2回, slei-
ghts: conceits, deceipts (Chapman), height: right: weyght, strai-
ght 3回, weight (Drayton), height: weight, streight 5回 (Jon-
son)。17世紀…sleight: weight (Herrick), Eyes: Keys (Lovelace),
height: weight, sleight: deceit: straight (Herbert), height: con-
ceit, strait: wait (Waller), height: sleight, weight 2回, sleight:
straight (Whiting), height: weight 5回 (Vavgham), heyght:
straight (cotton), height: weight 6回 (Dryden).

C. 16世紀, …desire: require: prayer (Wyatt), advise: enter-
prise: rize: seize, encline: eyne: repine: slaine (Spenser), apply:
key, guide: waide (Chapman), combyne: Lyne: Hein, Rhine:
plaine (Drayton), deny: say, equaliz'd: seiz'd, hie: bay, inability:
obey, lie: key (Hannay)。17世紀, …five: deceive (Herbert), pro-
geny: they (Bosworth), implies: days (Vaugham).

Kökeritz は, どのような訳か知らないが, MEi と MEēy の脚韻を示
していない。Dobson⁽²⁵⁾ は「MEi と MEēy > Late MEāy との変動に
依存するもの」と解釈している。MEi と MEēy > Late MEāy との間で
変動のあった音声学者の証拠は確かに存在する。height⁽²⁶⁾ は Gill, But-
ler, Poole 等では MEi を持っているが, Cheke, Willis, Cooper で
は MEāy を持っている。sleight⁽²⁷⁾ は Hodges, Cole, Strong, Brown

では MEi を, Willis では MEāy を持っている。weight⁽²⁸⁾ は Bullokar, Gil, Hodges では MEi を, Cocker, Richardson では MEāy を持っている。Freight⁽²⁹⁾ は Fox と Hodges の同音語表では MEi を持っている。eight⁽³⁰⁾ は Richardson では MEi を持っている。aye⁽³¹⁾ は Wilkins と Cooper では MEāy を, Prince, Gil では MEi を持っている。A₁ の height, sleight, weight, eight, aye には MEi 異形が存在していた証拠があるため, これらを含む脚韻は実際には MEi 同志の脚韻であるのかも知れない。A₂ の keight, streight に MEi 異形の存在を示す正音学者の直接的な証拠はないが, eight, freight, height, sleight, weight には MEi 異形が存在した証拠があるため, keight, streight も MEi 異形を持つ可能性が十分に考えられる。height, sleight, deceipt,⁽³²⁾ conceit, key には MEēy 異形が存在していた証拠があるため, B のこれらの語を含む脚韻は実際には MEāy 同志の脚韻であるのかも知れない。A₁, A₂, B の脚韻に関しては Dobson の解釈も成り立つ。彼は MEi を ey と綴った異常綴字を「これらは eye, height のような多くの普通語における ey と i との変動に基づくものかも知れない」と説明している。にもかかわらず, eye, -eigh (t) 以外の語で MEi と MEēy の変動のあった音声学者の証拠を挙げていない。C のように, MEi と MEēy の変動に基づかない MEi と MEēy の脚韻は MEi に対して [ey] を認めない Dobson-Köckeritz 説にとっては不利な証拠となる。MEi と MEē の脚韻は16世紀には見出されているが, MEi と MEēy の脚韻は16世紀後半から17世紀前半にかけて見出され, 17世紀後半には余り見出されなくなる。これは, MEi は MEēy と押韻するよりも MEōy と押韻する方が多くなって来るからである。

2. 3. 3. MEi: MEōy 16世紀, …awhile: toyle: assoyle, soyle, soyle: toyle, beguyle (d): assoyled: despoyled: foyld, boyle: toyle, beguyled: recoyled, bynd: mynd: ioynd, chyld: beguyled: boyled: spoyld, cryde: destroyed, exyled: defyled: despoyled: foyled, fyled: exyled: despoyled: beguyled, guile: foile: despoile,

despoile, pile: guile: spoile: toyle, mile: spoil: toil: while, reconcile: while: spoile: toile, replide: annoyd: destroyd, revile: while: assoile, ryde: stryde: guyde: annoy'd, side: pryde: annoyde: destroyde, style: while: guyle: foyle, twynd: coynd: purloynd, vile: erewhile: spoile: stile, spoile: exile: spoile: while, whyle: despoile: recoyle: toyle, spoil, soyle: spoyle: spoile: toile 2回, spoyle: toyle, toyle: assoyle: belaccoyle, toyle: turmoyle, turmoile: spoile: toile, wyld: despoyld: toyld (Spenser), discipline: ioyne (chapman), bride: imploy'd, Guyne: coyne: purloine, skyes: noyse (Drayton), combin'd: join'd, defiles: boiles (Donne), huswifery: employ (Hannay), confin'd: disjoynd, mine: disjoyne, resigne: coyne (Carew. T) mind: enjoin'd, lies: enjoys (Chalkhill). 17世紀, ...sign: coin, smile: coil (Suckling), combine: divine: join, mind: refin'd: join'd, resign: wine: join, shine: combine: join, smile: broil: toil (Benlowe), combined: disjoined, decline: coin, die: employ, inspire: choir 2回, isle: toil 4回, mind: joined, reconcile: toil, shine: join, side: employed, smile: toil (waller), Paradise: choice (Cleveland), applyit: deny it: enjoy it, dyes: joyes 2回, eye (s): joy, (s) 6回, joyes 2回, miseries: joyes, mine: joine, minoritie: joy, 2回, reconciled: spoyled, rise: joyes 2回, smile (s): spoyle: toyle, spoiles, suffice: joyes: joyes, stile: foyle, style: spoyle, while: spoile (Crashaw), awhile: soile, exile: Soyle (Lovelace), kind: Joyn'd (Marvell), lyes: voice (Vaughan), decline: enjoin, die: joy, exile: spoil, smiles: toils (Stanley), arise: joys 2回, Crucify: joy, nemies: joys, lie: joy: Troy, lies: boys, I: joy, melody: enjoy (Hall), defiles: boyles, die: enjoy, eye: destroy, fly: destoy, heresie: inconstancie: destroy, skies: starry-Boies (Cotton), combin'd: join'd, design: enjoin, find: join'd, refine: coin, shine(d):

coin, uncoin'd, wide: cloy'd (Katherine), Ally: Joy, awhile: spoil, beguile: Spoyl 2 回, beguil'd: spoil'd, behind: kind: join'd, Bride: enjoy'd, Child: foied, undefild: unsoil'd, confine (d): join, dis-joy-n'd, defile: Oyl 2 回, denies: joyes, deny: Boy, joy, design: join 3 回, Design: join 7 回, design'd: join'd 3 回, discipline: join Divine: coin, join, mine: join, dy'd: pride: destroy'd, find: 8 回, fly: Boy, Joy, glide: destroy'd, guile: spoil, high: Liberty: Boy, Isle: Toyle, Kind: joyn'd, lie: joy, line: coin, mine: join, join. Line: joyn 4 回, ly:enjoy, lyes: employs, mine(d): join 2 回, purloin, disjoyn'd, Mind: join'd 4 回, Nile: toil, pile: boil, refines: joyns, joins: loins, refin'd: joyn'd, repines: disjoyns, Rhine: joyn 2 回, rise: destroys, joys, shine: Vine: disjoyn, Shines: loyns, Shrine: join, sign: Coin, join 2 回, wine: join, smile (s): while: boyl, Toyles, Swine: joyn 2 回, thine: joyn, purloin, twine: joyn, Vine: disjoyn, joyn, while: boil, Oyl, wind: join'd, Wind: join'd, Wine: joyn (Dryden), design'd: mind: joind, thine: join, tile: spoil, while: spoil, wind: join'd (Flatman), Devine: Coin 2 回, find: kind: joind, mine: desigh: join, Stile: Foil, Wine: Coin 2 回, behind: purloin'd, combine: twine: join; design'd: joyn'd, Devine: join, find: mind: joyn'd, I: Toy: Sky, Isle (s) Toyle (s) 2 回, smiles: Toils, thine: Boyne (Shadwell), Combine: Line: join, cry'd: employ'd, Devine: enjoyn, design: joyn, refin'd: joyn'd, Lyes: Joye, shine: joyne 2 回, thighs: enjoys, unkind: joyn'd (Wilmot), arise: Joys, behind: join'd, disjoin'd, Blind: join'd, declines: Loins, define: join, find: disjoin'd, Divine: join, fly: employ, Joy, dye: Joy, Isle: Smile: Toil, Toil, kind: injoyn'd, lies: enjoys, Lyre: Choir 2 回, Mine: disjoin, join 2 回, purloin, twine: join, Mind: join'd 2 回, wind: joyn'd, Nine: joyn, reconcile: Toil, resign: joyn, refin'd: join'd, Rhine:

join, Shine: enjoyn, shine: Boyne, join, Sign: join (Prior). aspire: choir, combine (d): join, humankind: join'd, defin'd: join'd, design (s): Coin, join, Coins, die: soy, dine (s): join, Coins, divine: coin, join 3回, line: join, find: join'd 2回, lie: joy, line: join 4回, luxury: enjoy, mankind: join'd, mind: join'p 2回, mind: join'd 5回, mine=join 2回, Mines: joins, nine: join, pile: toil, Proserpine: join, refin'd: join'd, shine: join 2回, side: enjoy'd, thine: join, tie: joy, Vine: join, Wild: spoil'd (Pope)

MEi と MEōy の脚韻は [əy] 又は [ʌy] に基づくものである。Early ModE には MEōy に [əy] (又は [ʌy]) の発音が存在していた事に関しては音声学者⁽³³⁾ の証拠がある。Kökeritz⁽³⁴⁾ も MEi と MEōy の脚韻を MEi の [əy] の証拠として用いている。筆者が Ellis-Wyld 説を認めがたいと考えるのは MEi と MEōy の脚韻及び正音学者の証拠があるにもかかわらず、MEi に [əy] を認めていないからである。16世紀では MEi と MEōy の脚韻は、Spenser の例を除けば、散見される程度であり、MEi と MEēy の脚韻の方が MEi と MEōy の脚韻より多く見出されている。17世紀でも、MEi は MEēy 及び MEōy と押韻している。しかし、MEi が MEēy 及び MEōy と押韻する相対的頻度は16世紀とは逆で MEi と MEēy の脚韻は少なくなり、MEi と MEōy の脚韻が多く見出されるようになる。MEi は通時的には先ず MEĕ と押韻し、16世紀後半から17世紀前半にかけて MEēy と押韻し、17世紀後半から MEōy と押韻するようになっている。この事実は十分注目するに値する。MEi と MEōy の脚韻は Dobson-Kökeritz 説及び Chomsky-Halle 説にとって、MEi の [əy] の存在を裏付ける意味で重要な証拠となる。

3. 結 論

MEi の発達過程に関して、今日までに、(1) MEi が二重母音化し、lowering が完了した後で centralization が生じた。(Ellis-Wyld 説)
(2) MEi が二重母音化し、centralization が生じた後で lowering が生

じた。(Dobson-Kökeritz 説) (3) MEī が二重母音化した後で、先ず lowering が生じ、その後で centralization が生じ、その後で再び lowering が生じた。(Chomsky-Halle 説) という三つの見解が提唱されている。

§ 2 で MEī の発達過程を考察するのに関係のある証拠を再検討してきた。

- (i) Smith 等の MEī を MEi の長音とする記述を Dobson のよう [əy] と解釈するのではなく [iy] を表わしているものと解釈する。
- (ii) Hart 等の MEī の ei という転写を Kökeritz のように [əy] と解釈するのではなく、脚韻からの証拠をも考慮し、[ey] を表わしているものと解釈する。
- (iii) MEī と MEē の脚韻を MEī の ModE 初期の [iy] が古風な発音としてまだ並存し、その音を利用した脚韻と解釈する。
- (iv) MEī と MEēy の脚韻を Dobson のように eye, height のような語における ī と ēy の変動に基づくものと解釈せず、[ey] に基づくものと解釈する。(この MEī と MEēy の脚韻は16世紀後半から17世紀前半にかけて見出されている。)
- (v) MEī と MEōy の脚韻を [əy] に基づくものと解釈する (この MEī と MEōy の脚韻は17世紀後半に多く見出されている。) ことによって MEī の発達過程は

	1550年	1600年	1650年	1800年
MEī [ī]	[iy]	[ey]	[əy]	[ay]

であると推定する。

注

- (1) Ellis, A. J. *On Early English Pronunciation*. Part V, pp. 826-827.
- (2) Sweet, H. *A History of English Sounds*. p. 15.
- (3) Lehnert, M. *Die Grammatik des englischen Sprachmeisters John Wallis*. pp. 98-99.
- (4) Wyld, H. C. *A History of Modern Colloquial English*. p. 223.
- (5) Kökeritz, H. *Shakespeare's Pronunciation*. pp. 216, 244 ff.

- (6) Dobson, E. J. *English Pronunciation 1500-1700*, pp. 659 ff, 683 ff.
- (7) Stockwell, R. P. *Mirrors in the History of English Pronunciation*. pp. 20-37.
- (8) Prins, A. A. *A History of English Phonemes*. pp. 128 ff, 129 ff.
- (9) Luick, K. *Historische Grammatik der englischen Sprache*. pp. 559-581.
- (10) Jespersen, O. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. Part 1, pp. 234-236.
- (11) Ekwall, E. *A History of Modern English Sound and Morphology*. pp. 37 ff, pp. 52 ff.
- (12) Zachrisson, R. E. *The English Pronunciation at Shakespeare's Time as Taught by William Bullokar*. pp. 54 ff, pp. 60. ff.
- (13) Chomsky, N and Halle, M. *The Sound Pattern of English* pp. 249-289.
- (14) Wolfe, P. M. *Linguistic Change and the Great Vowel Shift in English* pp. 155-156.
- (15) Wyld, H. C. *A Short History of English* p. 187, Wyld, H. C. *op.cit.* pp. 223-24.
- (16) Kökeritz, *op. cit.* p. 217.
- (17) Prins, *op. cit.* p. 218.
- (18) Dobson, *op. cit.* p. 662, note 1.
- (19) Kökeritz, *op. cit.* p. 216, footnote 4.
- (20) Dobson, *op. cit.* p. 766.
- (21) 荒木一雄. 近代標準英語母音組織の発達(1), (2)名古屋大学文学部研究論集 LXX, LXXIII. 拙稿. 岐阜女子大学紀要 5・6・7号.
- (22) テキストには下記のものを利用した.
 Benlowe, E. *Minor Poets of the Caroline Period*. ed. by Saintsbury, G. Oxford 1968
 Bosworth, W. *Minor Poets of the Caroline Period*. ed. by Saintsbury, G. Oxford, 1968.
 Carew, T. *The Poems of Thomas Carew*. ed. by Rhodes Dunlap, Oxford 1949.
 Chalkhill, J. *Minor Pyets of the Caroline Period*. ed. by Saintsbury, G. Oxford 1968.
 Chapman, G. *The Poems of George Chapman*. ed. by Phyllis Brook Bartlett. N. Y. 1962.
 Cleveland, J. *The Poem of John Cleveland*. ed. by Morris, B. and Withington, E. Oxford, 1967.
 Cotton, C. *Poems of Charles Cotton*, ed. by Buxton, J. London. 1958.

- Crashaw, R. *The Poems of Richard Crashaw*. ed. by Martin, L. C. Oxford, 1957.
- Donne, J. *Poetical Works*. ed. by Herbert, J. C. Grierson. Oxford, 1971.
- Drayton, M. *Poems of Michael Drayton*, ed. by Buxton, J. London, 1953.
- Dryden, J. *The Poems of John Dryden*, ed. by Kinsley vols. I, II, Oxford, 1958.
- Flatman, T. *Minor Poets of the Caroline Period*. ed. by Saintsbury, G. Oxford, 1968.
- Fletcher, G. *Poems of Fletcher, G in The Works of the English Poets from Chaucer to Cowper*. ed. by Chalmer: 1910.
- Fletcher, P. *The Poems of Fletcher, P. in the works of the English Poets from Chaucer to Cowper*. ed. by Chalmers. A. vol. Vi 1810.
- Greville, F. *Poems and Dramas of Greville, F.* ed. by Bullough, G. London, 1938.
- Hall, J. *Minor Poets of the Caroline Period*. ed. by Saintsbury, G. Oxford, 1968.
- Hannay, P. *Minor Poets of the Caroline Period*. ed. by Saintsbury, G. Oxford, 1968.
- Herbert, G. *The Works of George Herbert*, ed. by Hutchinson, E. E. Oxford, 1953.
- Herrick, R. *The Poetical Works of Robert Herrick* ed. by Martin, L. C. 1956.
- Katherine, P. *Minor Poets of the Caroline Period* ed. by Saintsbury, G. Oxford, 1968.
- Lovelace, R. *The Poems of Richard Lovelace*. ed. by Wilkinson. C. H. Oxford, 1930.
- Marvell, A. *The Poems of Andrew Marvell*. ed. by Macdonald, H. London, 1952.
- Milton, J. *The Complete works of John Milton*. ed. by Douglas Bush. Harvard University, 1965.
- Pope, A. *The Poetical Works of Pope. A.* ed. by Ward, A. W. London 1901.
- Prior, M. *The Literary Works of Matthew Prior*. ed. by wright, H. B. and Spears, M. K. Oxford. 1959.
- Raleigh, Sir Walter. *The Poems of Sir Walter Raleigh*. ed. by Latham.

A. London, 1962.

Shadwell, T. *The Works of Shadwell, T.* ed. by Summers, M. vol. V
London, 1927.

Spenser, E. *Faerie Queen*, ed. by Smith, J. C. Oxford, 1909.

Suckling, Sir John. *Poems of Sir John Suckling in the Works of the
English Poets from Chaucer to Cowper*, ed. by Chalmers, A. vol. vi,
1810.

Vaughan, Henry. *The Works of Henry Vaughan*, ed. by Martin, L. C.
Oxford, 1957.

Waller, E. *The Poems of Waller, E.* ed. by Drury, G. T. vol. I, II.
London, 1901.

Whiting, N. *Minor Poets of the Caroline Period.* ed. by Saintsbury, G.
Oxford, 1968.

Wilmot, J. *Poems of John Wilmot Earl of Rochester*, ed. by Vivian
De Sol Pinto, London, 1953.

Wyatt, Sir Thomas. *Collected Poems of Sir Thomas Wyatt.* ed. by Muir,
K. London, 1966.

Wycherley, W. *Miscellany Poems* ed. by Summers, M. New York, 1964.

(23) Kökeritz, *op. cit.* p. 220.

(24) Dobson, *op. cit.* p. 664.

(25) *ibid* p. 662.

(26) *ibid* p. 666.

(27) *ibid* p. 666.

(28) *ibid* p. 666.

(29) *ibid* p. 666.

(30) *ibid* p. 666.

(31) *ibid* p. 782.

(32) *ibid* p. 650.

(33) Zachrisson, *op. cit.* pp. 220-22.

(34) Kökeritz, *op. cit.* p. 217.

参考書目

荒木一雄. 1972 「MEi, ū の発達過程について」『名古屋大学文学部研究論集』
55.

Chomsky, N. and Halle, M. 1968 *The Sound Pattern of English* N. Y.
Craigie, W. A. 1969 *Problems of Spelling Reform* Clarendon Press.

Danielsson, B. 1955 *John Hart's Works on English Orthography and Pro-*

- nunciation*. Part I. Stockholm.
- . 1963 *John Hart's Works on English Orthography and Pronunciation*. Part II. Stockholm.
- Davis, C. 1973. *English Pronunciation from the 15th century to the 18th Century*. Greenwood.
- Dobson, E. J. 1955 "Early Modern Standard English", *Transaction of the Phonological Society*.
- . 1968 *English Pronunciation 1500-1700* Oxford.
- Eardmann, P. H. "The English Great Uowel Shift and Generative Phonology", *Language* 243-273.
- Ellis, A. J. 1869-89 *On Early English Pronunciation* London.
- Gimson, A. C. 1962. *An Introduction to the Pronunciation of English*. London.
- Halle, M. and Keyser, S. T.J. 1967. "Review of Danielsson" *Language* 43 773-787.
- Hill, A. A. 1953. "Review of Kökeritz", *Language* 29 Hockett, C. F. 1965. "Sound Change", *Language* 41.
- Jespersen, O. 1909. *Modern English Grammar* I. Heidelberg.
- King, R. O. 1967 "Functional Load and Sound Change" *Language* 43
- . 1969. *Historical Linguistics and Generative Grammar*, N. Y.
- Kökeritz, H. 1953. *Shakespeare's Pronunciation*, New Haven.
- . 1961. "Review of Dobson". *Language* 37
- . 1961. "Elizabethan Prosody and Historical Phonology" *Approaches to English Historical Linguistics*, Holt, Rinhart and Winston.
- . 1965. "Dialectal traits in Sir Thomas Wyatt's Poetry." *Approaches to English Historical Linguistics*, Holt, Rinhart and Winston.
- Kurath, H. 1963. *A Phonology and Prosody of Modern English*. Ann Arbor.
- 日下部徳次, 1962. "On the Interpretation of the Evidence for Shakespeare's Pronunciation"『英語学』2.
- Luick, K. 1914. *Historische Grammatik der englischen Sprache*. Leipzig.
- Matthews, W. 1959, "Review of Dobson (1957)" *Modern Language Notes* 4.
- Penzl, H. 1969. "The Evidence for Phonemic Change." *Approaches to English Historical Linguistics*. Holt, Rinhart and Winston.
- Prins, A. A. 1972 *A History of English Phonemes*. Leiden.
- Scott, C. T. 1967 "On the Dating of NE ee and ea Spellings from MEe

- and e" *Approaches in Linguistics Methodology*. The University of Wisconsin Press.
- Stockwell, R. P. 1969. "Mirrors in the History of English Pronunciation." *Approaches to English Historical Linguistics*. Holt, Rinhart and Winston.
- Sweet, H. 1888 *A History of English Sounds*. Oxford.
- Viëtor, W. 1906. *A Shakespeare Phonology*. Marburg.
- Wijk, A. 1937 *The Orthography and Pronunciation of Henry Machyn, the London Diarist*. Uppsala.
- Wang, W. 1968 "Vowel Features, Paired Variables, and the English Great Vowel Shift." *Language* 44
- Wolfe, P. M. 1972. *Linguistic Change and the Great Vowel Shift in English*. Berkeley and Los Angeles.
- Wrenn, C. L. 1943 "The Value of Spelling as Evidence." *Transactions of the Philological Society*.
- . 1954. *The English Language*. Repr. Tokyo.
- Wright, J. 1905. *The English Dialect Grammar*. Oxford.
- Wyld, H. C. 1927. *A Short History of English*. Murray
- . 1937. *A History of Modern Colloquial English*. N. Y.
- . 1965. *Studies In English Rhymes From Surrey to Pope* N. Y.
- Zachrisson, R. E. 1913. *Pronunciation of English Vowels 1400-1700*. Göteborg.
- . 1970. *The English Pronunciation at Shakespeare's time as Taught by William Bullokar*. Repr. N. Y.